

拓友 28

日本大学拓友会会報

生物資源科学部 国際地域開発学科

第28号 2005年6月発行

～拡がる国際交流・新たな取り組みも～



絆を強め、さらなる発展を期して

拓友会会長
内田 俊太郎

拓友の皆様におかれましては、ますますお元気でご活躍のこととお慶び申し上げます。

さて、今年4月には、新たに135名の正会員(卒業生)と134名の準会員(新入生)をお迎えしました。会員一同、心から歓迎いたします。

これから皆さんには、社会生活と学園生活の中で、何事かを成し遂げた、という達成感、充足感をぜひ味わっていただきたいと思います。なぜなら、その経験は深いところで記憶としてとどまり、とどまった記憶は決して過去のものではなく、今現在のものであり、幾度となく呼び覚まされ、永い人生のなかで皆さんを支えてくれるに違いないからです。

さらにその記憶は、単に自分だけにとどまらず、他の人の全く異なる経験に対しても深く共感でき、強い絆を結ぶことを可能にするからです。そしてこのことこそが、社会全体で絆が弱まるなかであって、拓友会員相互の絆を強くする根本となるのだと考えています。

2年後の2007年には、拓友会結成60年、学科設置70年という大きな節目を迎えます。本年はその節目に向かった取り組みを始めたいと存じます。会員相互の絆をさらに強め、共感の輪を広げながら、拓友会をさらに発展向上させるためにできる限りのご協力と、皆様の積極的な、ご意見、ご希望をお寄せいただきますようお願いいたします。

皆様のご健勝と拓友会の発展を祈念してご挨拶いたします。

総会開催

平成16年度 拓友会総会・懇親会開催

平成16年6月9日日大生物資源科学部13階において平成16年度拓友会総会・懇親会が開かれました。まず、内田会長より挨拶があり、井上氏(18期)を議長に選出し、議事に入りました。

第1議題は平成15年度事業報告の件で、(1)総会開催：平成15年12月6日、日大生物資源科学部で開催、(2)懇親会開催：同日六会日大前「和民」にて開催、(3)幹事会開催：平成15年11月29日日大生資学部で開催、(4)名簿の整理、(5)宮崎賞・拓友賞の授与宮崎賞：該当者なし拓友賞：山田智英君、(6)卒業生への記念品授与：男子学生：タイピン、女子学生：スカーフ留めの報告が行われ、承認されました。

第2議題は平成15年度決算報告・会計監査の件で、収入の部は会費1,121,100円通信補助172,000円で合計1,293,100円、支出の部は697,866円で、会報を発行しなかったため黒字となった旨報告がありました。そして会計監査より、正常との監査報告があり、事業について了承、承認されました。

第3議題は平成16年度事業計画の件で、(1)総会・懇親会の開催：平成16年6月19日日大生資学部、(2)幹事会の開催：第1回幹事会平成16年6月12日(土)日大生資学部、第2回幹事会平成17年3月5日(土)日大生資学部(3)名簿の整理、(4)「拓友会会報」第27号の発行平成16年5月、(5)宮崎賞・拓友賞の授与、(6)ホームページの開設、会報の公開、会員名刺の公開ページ、総会開催通知等の事業計画について了承、承認されました。

第4議題は平成16年度予算の件で、収入の部で、



内田会長総会挨拶

1,300,000円の収入、支出の部1,423,500円で、会報発行と、懇親会に学生の代表を入れることで赤字になることが提案され、討議の結果了承され、承認されました。最後に谷地副会長から閉会の挨拶があり、総会を終りました。

そののち、総会終了後、懇親会までの間、学生による海外研修報告が行われ、今年度は増見ゼミの齊藤君、稲川君によるフィリピン調査の報告がありました。

続いての懇親会では、内田会長の挨拶にはじまり、近藤顧問の乾杯の発声で懇親に移り、参加者全員の一言があり、懇親に花を添えました。なお、今年度から学生の海外研修報告を入れることになったため、各ゼミから二人ずつの代表が参加し、ゼミでどんなことをしているのかとか、将来の抱負を語るなどOBとの交流に花を咲かせていました。

入学状況

国際地域開発学科の平成17年度新入生は134名で、その内男子84名(62.7%)、女子50名(37.3%)です。また中国からの留学生が1名在籍しています。出身高校の種別は、日大附属高校が55名(41%)、附属高校以外の出身者が79名(59%)です。公・私立別では、公立高校52名(38.8%)、私立高校82名(61.2%)です。



昨年のスポーツフェスタ・応援優勝・総合2位

都道府県別(出身高校所在地)では、神奈川県出身者が44名と最も多く、ついで東京都の22名、3番目が茨城県の10名です。この他、学生の出身都道府県は、北海道から鹿児島県まで、28都道府県及びます。1年次クラスには、新入生134名に復学・留年生が13名加わり、総数は147名となります。



1年次研修(5月21日:辻堂海岸にて地引き綱)

就職状況

今春卒業した135名(男77名・女58名)の就職状況は学部資料(3月末現在)から次のことがわかる。

まず就職決定率は男91.1%・女91.4%・計91.3%であるが、去年はそれぞれ94.6%・86.1%・91.3%だったので男がやや悪化し女が改善したといえる。これは学部平均をやや上回っている。

つぎに就職先を産業分類でみると卸・小売に29(女子内数12)名、製造、情報通信、飲食店・宿泊、教育・学習支

援の各業種に各5(2)名、サービス業と地方公務員に各4(2)名があり、他に農協、建設、運輸、金融、医療・福祉の各業種に1~2名がある。他方で進学(大学院・留学等)が11(4)名、研究生・聴講生を含む無業に21(9)名、アルバイト・派遣・自由業に15(5)名があり近年の傾向といえる。また過年度卒業生を含む4名が青年海外協力隊に合格している。

研修計画

本年8月、本学科では学科の人材育成の目標とする発展途上地域の経済・社会開発や農業に関する国際開発協力に従事することを目指している学生を対象に、ガーナにおいて幅広い視野と国際感覚、創造的、実践的技術と専門知識の向上を目的とした18日間の海外研修を予定している。これは、深刻な開発課題である貧困、食糧安全保障、環境等の問題をアフリカが抱え、本学科が目指す人材育成の実践の場としても適していることから計画されたものである。私自身国際開発協力とは実践学であり、まず、現場から学ぶことからスタートすることが学生に一番の教育であると信

ガーナ大学との提携に基づく国際開発協力の現地研修計画



じている。主な研修内容等は次の通りである。

(1)ガーナ大学農学部(アフリカの社会・文化・経済・農業農村等講義)、(2)国際機関(FAO等)、二カ国間(JICA)、NGOの現場から国際協力を学ぶ、(3)野口英世医学研究所(保健医療)訪問、(4)伝統的酋長制と農民・農村女性の交流から農村社会文化を学ぶ(オチョレコ村)、(5)アフリカの奴隷歴史と社会・文化を学ぶ(ケープコースト)、(6)農業技術開発を学ぶ(ガーナ大学試験場)、(7)環境・貧困を学ぶ(アコソボ)、(8)営農調査・技術協力フィールド・サイエンス・アプローチ実習(アシャマン、オチョレコ村)。

海外交流

JICA筑波国際センターのキューバ小規模稲作技術コース研修員一行9名が5月24日に本学科を訪問。そこで、標記のJICA・IDS特別セミナーを大講堂で開催しました。第1部「カリブ海の国キューバー人々と暮らしー」では、H・カイロ氏(ピリャ・クララ県大衆米栽培官)らが、地理、歴史、文化、社会の面からキューバを紹介。第2部は「もっと知りたいキューバー農業、地域、開発の動向ー」をテーマに、L・ロドリゲス氏(ル

特別セミナー「ラテンアメリカ研究交流会」を開催



タ・インパラソ稲作農産加工複合体大衆米専門官)らから、農業・食料問題の現状、稲作農業の動向、日本での稲作技術研修について報告していただきました。

そのあと、13階で交流会。陽気なラテンのリズムに乗ってサルサとジルバのダンスレッスンがあり、学生も多数参加して大盛況のうちに、盛りだくさんの一日を終えました。

海外の拓友

国際地域開発学科の教育目標は、旧拓殖学科の教育理念を引き継ぎ、途上国で地域開発・国際協力に携わる人材を育成することにあります。学科発足から現在に至るまで、青年海外協力隊に参加した卒業生は100名を超えます。時代のニーズに適した即戦力の人材を育成するため昨年度より、開発協力ボランティア養成プログラムが発足し、青年海外協力隊の合格率が向上しました。

現在、語学訓練中も含めると10名の卒業生が協力隊員として活躍しています。協力隊経験後の進路も様々

海外で活躍する卒業生

ですが、さらなる技術協力専門家として、高橋貞雄氏(パナマ)、坪井達雄氏(ウガンダ)が派遣中です。また、国際協力専門員として、富高元徳氏(ウガンダ)、FAO職員として新野有次氏(タイ)がご活躍中です。さらに、ボルネオ生物多様性・生態系保全プログラムの初代チームリーダーとして、国際協力機構(JICA)職員の草野孝久氏が帰国されました。コンサルタント会社では、富岡丈朗氏など多くのOBが活躍されています。

今後とも、さらなるOBのご活躍を祈念するとともに、在校生の励みになることを期待します。

留学生便り

ソウルからの便り 4年 山口千加

今年の春に、交換留学生として、韓国語の研修のためにソウルの慶熙大学に留学した4年次山口千加さんから学科の皆さんに便りが届きましたので紹介します。(受信者:井上)

ソウルに着いてから2週間、新しくできた寮にいます。広くてきれいで、部屋の中にトイレもシャワーもあって気に入ってます。すごく快適なのに、これで半年で4万5千円ぐらい、安いでしょ!オンドルがあるから室内は半袖で大丈夫なくらい。

午前中は韓国語の授業。私のクラスは13人で、日本・中国・アメリカ・オーストラリアから来た生徒だけ。他のクラスにはエジプトやプエルトリコから来た人もいるそうです。午後は課外で希望者だけテコンドー。参加してみたけど1回目でもうギブアップしてしまいました。



今校内ではサークルの勧誘やってます。私はYouth Hostelっていう旅行サークルに入りました。新入生歓迎会で夜は大学周辺にグループがいっぱい。またこの前学科対抗のダンスパーティーもってすごく盛り上がった。

近くにとっても良いカフェを発見。350円のコーヒー頼むと好きなケーキが選べてタダで食べられるの。しょっちゅう行ってしまいそう…。学食もおいしくて、200円あればお腹一杯になりますよ。

あ、そうそう。この間NHKが授業の様子を撮りに来ました!4月からのハングル講座の中のミニドラマの撮影にここを使わせてもらってるんだって。私もちょっと写ったかもしれないから、もしできたら皆チェックしといて下さいね。またメール送ります。みんなもぜひメール下さい。

返事遅くなるかもしれないけど…。

新任・退任



増富 桜子 副手

〔新任〕

増富 桜子 副手

中央大学総合政策学部を環境学を学ぶ。東京都出身。趣味は旅行。時々水泳も。これからもよろしくお願いします。

〔退任〕

黒田 有希子 副手

4月より生物環境工学科に配属転換になりました。2年間ありがとうございました。

拓 友 賞



拓友賞を春山浩庸君に授与

毎年、成績優秀で、なおかつ拓友会活動に積極的に協力してくれる卒業生に贈られる拓友賞は、国際地域開発学科より平成16年度卒業生の中から春山浩庸君が推戴され、その後の拓友会幹事会において承認されましたので、平成17年3月22日に行われた卒業記念パーティーの席上、谷地三知也副会長から授与されました。今後の拓友会に卒業生を代表して積極的に活躍されることを期待します。

平成17年度総会並びに学生・OB活動報告会・懇親会のお知らせ

平成17年度の総会並びに学生・OB活動報告会、懇親会を下記の通り開催いたしますので御案内いたします。出席希望者は御面倒でも事務局までお知らせください。

尚、総会開催日は定例日の1週間後に変更しておりますので御注意下さい。

記

開催年月：平成17年6月25日（土）
場 所：日本大学生物資源科学部 湘南キャンパス
時 間：「総 会」午後2時から3時 本館13階 会議室
「学生・OB活動報告会」午後3時から4時
「懇 親 会」午後4時から6時
会 費：お一人 3,000円
同伴者 2,000円（当日会場で徴収します）

参加希望者は、6月18日（土）までに拓友会事務局までお知らせください。

〒252-8510 神奈川県藤沢市亀井野1866
日本大学生物資源科学部内 拓友会事務局 早川 治
TEL&FAX. 0466-84-3457（事務局直通）
E - メール takuyu@brs.nihon-u.ac.jp

INFORMATION

- 拓友会ホームページを御覧下さい。
対象を限定せず、誰にでもみて頂けることを目指したものとなっています。
拓友会のURLは次の通りです。 <http://www.brs.nihon-u.ac.jp/~takuyu/>
- 会員のE・メールアドレスの登録
最近ではE・メールが一般化してきており、各自の情報のやり取りに利用されています。
拓友会での情報伝達にE・メールを利用する事も考え、今回、拓友会Eメールアドレスにアクセスいただき、その後拓友会より返信メールを送付し会員のE・メールアドレスを登録させていただきます。
拓友会E・メールアドレス takuyu@brs.nihon-u.ac.jp にアクセスお願い致します。
- 1万人の拓友の輪を広げよう!!
(1) 地方大会、懇親会の開催。
(2) 各種イベントの開催（同期会、ゼミOB会、恩師との食事会、ゴルフコンペ等）
(3) 住所不明の拓友会会員の情報及び慶弔情報
その他盛りだくさんな計画・情報を拓友会事務局にご一報下さい。
事務局から、会員情報、その他規定の範囲内で皆様の活動を応援します。

【編集後記】 27年前一。転勤で仙台を離れることになった。わたしは1本のツゲの樹を買った。そして大家さんに、娘たちが生まれた地であることの記念に植えさせて欲しいとお願いした。ツゲは門を入ってすぐ右側に植えられた。

このツゲは、当時のわたしとしては精一杯張りこんで買収求めたものであった。しかし、大家さんの庭の立派な樹々に囲まれてみると、いかにも貧弱に思え、門の近くに植えていただいたことに恐縮した。

それがどうだろう27年ぶりに再会したツゲは、背丈は手を伸ばせば届くほどにすぎないが、幹はふくらはぎほどの太さとなり、左右に広げた枝々は深い緑の葉を盛り上げるように抱えて自信に満ち、威風堂々たる姿で「やアー、いらっしやい」と迎えてくれているではないか。

先ごろ起きたJR尼崎線の大惨事を想起する。伊丹駅での停

車時間は普通20秒に、事故車は15秒に設定されていたという。思えば、交通はもとより、通信も、生産も、スポーツも、時間を縮めることこそ価値ありとして、寸秒を争ってきた。

そこで得た利便も多い。しかし、大切なものも失ってきたのではない。丹精、努力、忍耐、習熟、熟成などへの敬意だ。それらは全て、時間を要することがらだ。

時間を縮めて、あのツゲの風格と風貌を得ることはできない。そこには27年間の、大家さんのたゆまぬ丹精とツゲ自身の強靱な意思と精進、忍耐が刻まれている。

こう考えながら、拓友各位と本誌「拓友」のこれまでの歲月とこれからの歲月へと想いは馳せていった。

発 行：日本大学拓友会
編 集：編集委員会 平岡 完助
事務局：日本大学生物資源科学部
国際地域開発学科内
住 所：〒252-8510 神奈川県藤沢市亀井野1866
TEL&FAX. 0466-84-3457
印 刷：Basic Print